主体的・対話的な深い学びを実現するコミュニケーションの構造

林 徳治（甲子園大学），久世 均（岐阜女子大学）

NotebookLM

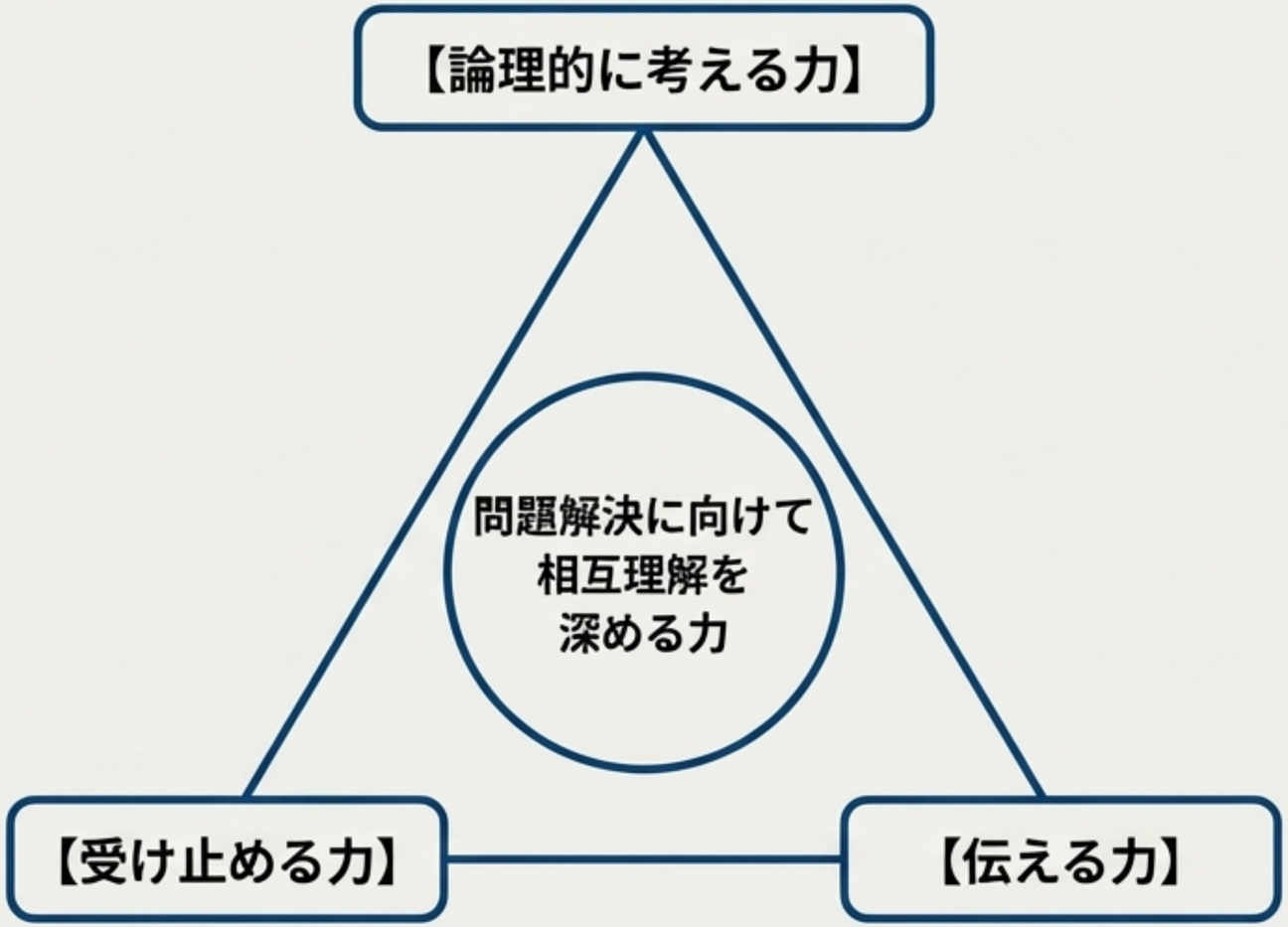
教育の質は、コミュニケーションの質で決まる

コミュニケーションとは何か？国語大辞典では「複数の人の間で記号を媒体とする相互作用」と定義されています。
人間はコミュニケーション活動により様々な課題を克服し、豊かなコミュニティを構築してきました。
本プレゼンテーションでは、教育現場における「相互理解」を深めるためのコミュニケーション能力の構造を解き明かします。

NotebookLM

コミュニケーション能力を構成する３つの力

相互理解を深め、問題解決へと導くコミュニケーション能力は、大きく３つの要素から成り立っています。この３つの力は相互に関連し、バランスが取れて初めて機能します。



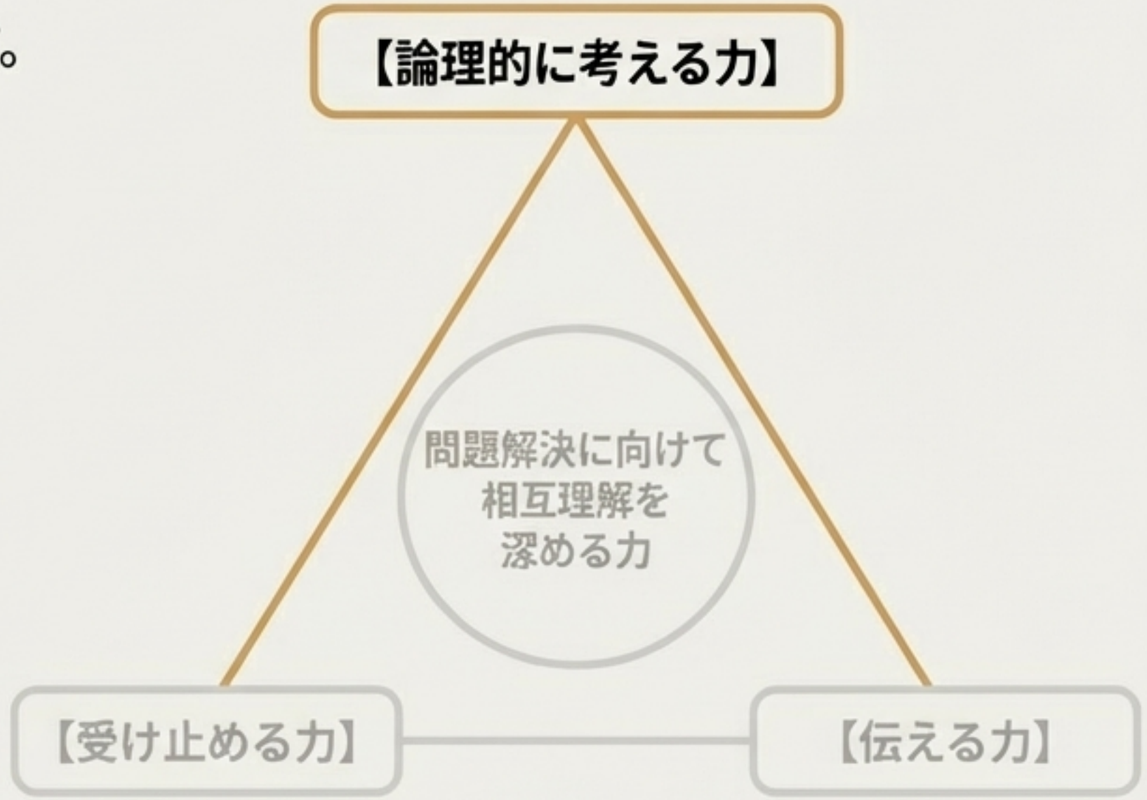
NotebookLM

PILLAR 1: 論理的に考える力

情報を収集・分析・提案するための思考の軸

これは、コミュニケーションの頂点に立つ思考力です。
以下の能力を含みます。

- 1. 問題を発見し情報を収集する力
- 2. 情報を読みとり考察する力
- 3. 問題を明快に分析する力
- 4. 解決策を提案する力



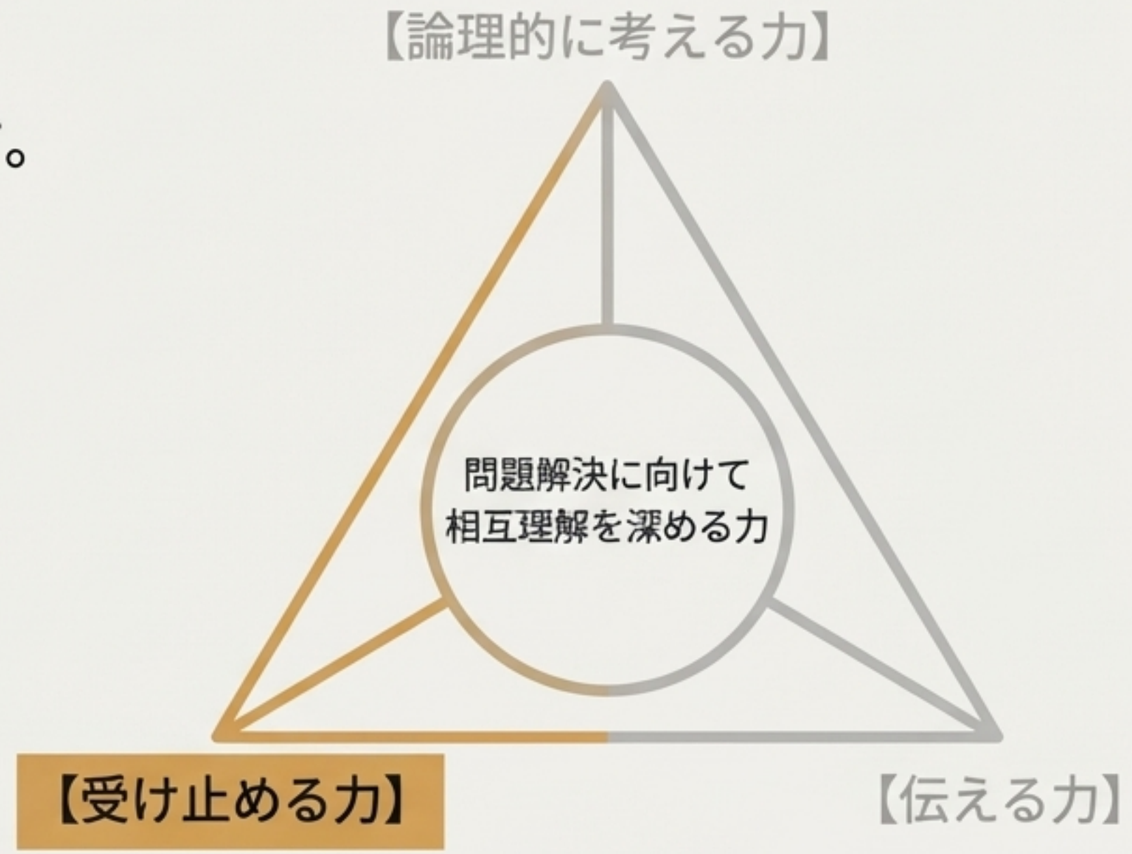
NotebookLM

PILLAR 2: 受け止める力

相手を受容し、双方が納得できる関係を築く傾聴の姿勢

一方的な主張（アグレッシブ）に陥らず、
相手の気持ちや言い分を尊重するための力です。

- 1. 受容的に聴く力
- 2. 相手の気持ちを理解する力
- 3. 相手を意欲的にする力



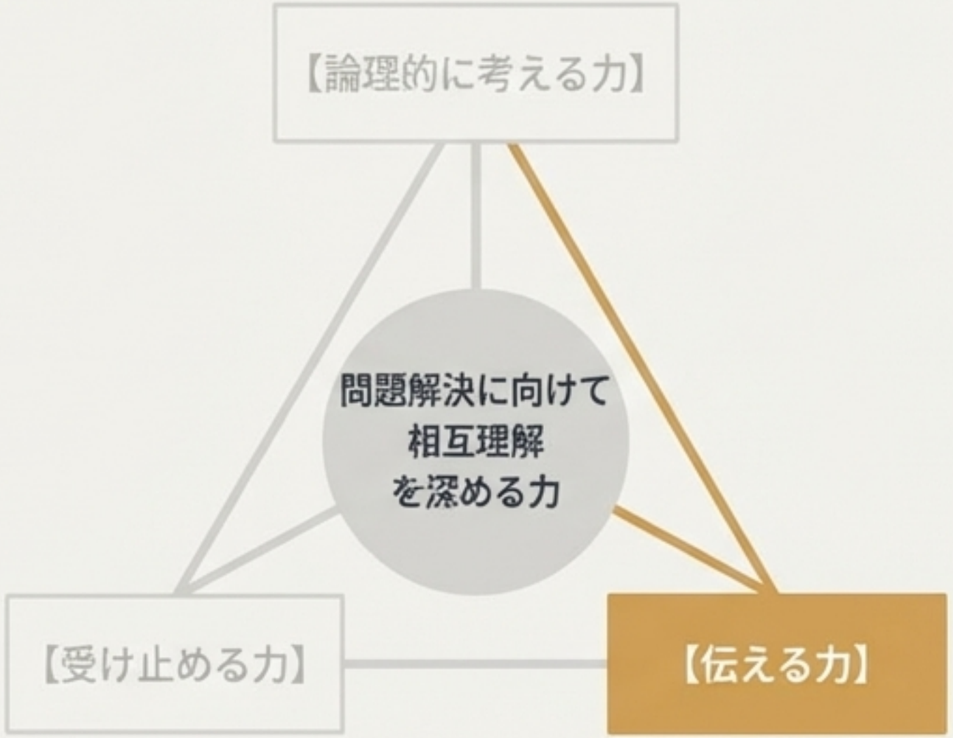
NotebookLM

PILLAR 3: 伝える力

効果的・効率的に、納得できる主張を構築し伝達する技術

相手の納得を引き出すための、プレゼンテーションに関する多様な知識・技能です。

1. 的確な指示を行う力
2. 情報を論理的に構造化する力
3. 相手の立場を知り共感される力
4. 自己の考えを主張できる力



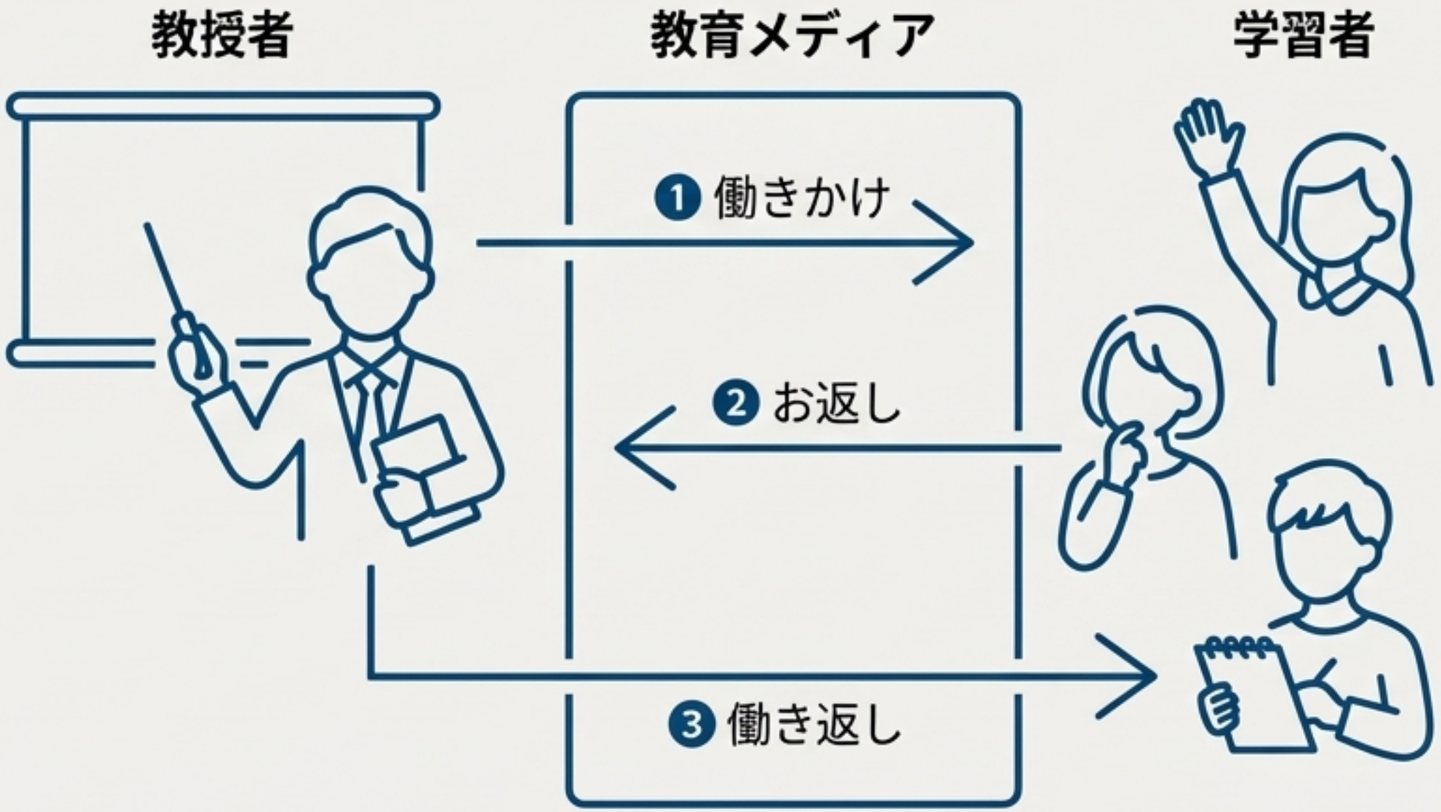
NotebookLM

では、この3つの力は教育現場でどのように機能するのか？

NotebookLM

教育的コミュニケーションの3方向サイクル

授業におけるコミュニケーションは、3つの過程の繰り返しによって営まれます。



❶ **教授者の情報提示（働きかけ）**
指示、説明、発問など

❷ **学習者のお返し**
回答、意見など

❸ **教授者の働き返し**
正解の提示、ほめるなど

NotebookLM

学習効果を最大化する「働き返し」：KRの力

教授者からの働き返しはKR（Knowledge of Results）と呼ばれ、学習過程で極めて重要な役割を果たします。教授者のKRの使い方によって、学習者の理解や意欲は大きく左右されます。

知的KR（Intellectual KR）

学習者の発言や発表に対し、正誤を知らせる認知的情報。

情的KR（Affective KR）

学習者の発言や行動をほめる、認めるなど、情意面に関わる情報。

NotebookLM

コミュニケーションの２つのチャネル：言語と非言語

私たちが情報をやり取りする方法は、大きく2つに分類できます。

言語コミュニケーション (Verbal Communication)

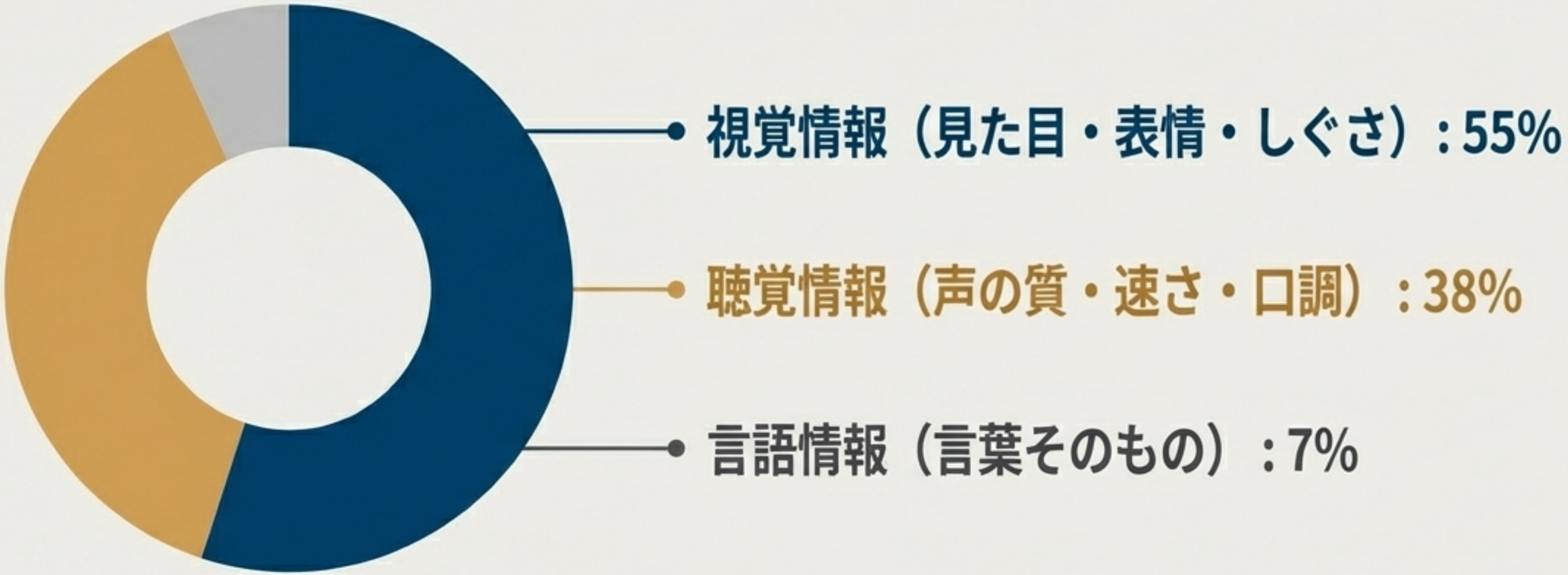
音声や文字といった記号体系を用いて、感情、思想、意思などを表現し、伝え合う活動。

非言語コミュニケーション (Non-Verbal Communication)

言葉以外で、五感を通して収集できるもの全て。表情、身振り、アイコンタクト、服装、においなど。

NotebookLM

人が受け取る情報、その93%は言葉「以外」から



心理学者アルバート・メラビアンの研究によれば、話し手が聞き手に与える影響において、非言語情報が圧倒的な割合を占めます。
この「メラビアンの法則」は、非言語コミュニケーションの重要性を明確に示しています。

NotebookLM

そして今、私たちは新たなコミュニケーション環境にいる

NotebookLM

現代メディアがもたらす光と影

マーシャル・マクルーハンは「メディアはメッセージである」と述べ、メディアを人間の感覚の拡張と捉えました。（衣服は皮膚の拡張、電話は耳の拡張など）

光（Light）

ICTの進展により、いつでも、どこでも、だれとでも、メディアを介した間接的なコミュニケーションが容易になった。

影（Shadow）

人と人との直接対話が減少し、予期せぬ事故や事件、犯罪を招くケースも増加。個人情報や価値観が脅かされる危険性。

NotebookLM

これからの時代に不可欠な「つきあう教養」

ICTが普及した現代社会では、これまで以上に
コミュニケーションの本質を理解することが重要です。

「論理的に考える力」「受け止める力」「伝える力」を磨き、
言語・非言語の両チャネルを意識すること。
それが、情報とメディアの光と影を見極める力となります。

私たち一人ひとりが「情報・メディアとつきあう教養」を養い、日々の生活で実践していく心構えが最も大切です。

NotebookLM

参考・引用文献

林徳治・藤本光司・若杉祥太『主体的に学び意欲を育てる教学改善のすすめ』　ぎょうせい，2016
林徳治・奥野雅和・藤本光司『元気がでる学び』ぎょうせい，2011
沖裕貴・林徳治（他７名『必携！相互理解を深めるコミュニケーション実践学（改訂版）』ぎょうせい，2010

NotebookLM